

- * 「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記1：1）聖書の骨格を表す。何もないところから、ひとりの神が「ことば」によって命令して天地が造られた。古事記や古代ギリシャ、バビロニアなどの国生み物語はみな「人間の神々」が交わってできている。これらは神話でしかない。しかし、聖書の創造物語は理路整然としている。最初に光、天、地と植物、太陽と月星、鳥類と魚類、家畜と獣、そして最後に人間が造られた。植物と動物は「種類にしたがって」造られたことが強調されている。「種」はそれぞれ独立して造られ、地上の生き物が秩序良く生きる道を神が意図しておられたのである。
- * 「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。（創世記1：26～27）」「ご自分の形として」というのは見える姿のことではない。人間が神様の性質をいただいているということ。知、情、意の基本的な人格は勿論、「聖」（罪がない）「義」（正しい）などを含んで、神は人間に完全であってほしいと願っておられる。これが私たち一人ひとりをお愛しておられる原点である。
- * 神は造ったものをすべて良しとされた。アダムとエバは最初は神の思惑通りであったが、神に逆らって禁止されていた木の実をたべたことから、「罪」が全人類に広がった。しかし、そんな私たちにも変わらずあわれみを施し、御子イエス・キリストを地上に送り、十字架につけて赦しを得させてくださった。それほど、人間をお愛しておられるのである。
- * 真の神（聖書の神）は目に見えないが生きて働いておられる。「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。」（使徒17：24～25）神の大きさ、偉大さは計ることができない。アテナイ像を納めるパルテノン神殿や大仏を納める大仏殿は必要ない。人間は弱いもので、目に見える者に頼ろうとする。神が造ったあらゆる被造物を神として信仰し、拝む者が多い。しかし、聖書の神はすべての創造主であり、目に見えないが人格をもって私たちをお愛しておられる。この方へのみ信頼して生きよう。